

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00911

研究課題名(和文)イスラエルへの移民に関するアラブ諸国出身のユダヤ人の歴史認識

研究課題名(英文)The Historical Perception of Jewish Immigrants from Arab Countries to Israel

研究代表者

臼杵 陽 (USUKI, Akira)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：40203525

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、とくにイスラエルへ移民したイラク系ユダヤ人、モロッコ系ユダヤ人、イエメン系ユダヤ人を中心に、時期を異にし、入植地域も違う移民過程とイスラエルでの定住をどのようにしているかを検討することであった。イスラエル建国前に移民したイエメン系ユダヤ人、アラブ・イスラエル紛争の勃発によって1950年前後に移民したイラク系ユダヤ人、そして1960年代以降モロッコ国王の出国許可によって移民したモロッコ系ユダヤ人の三つの事例では、移民の時期・動機の違い、イスラエル社会への同化の仕方、そしてその後のイスラエル社会で果たした役割を、各コミュニティの文化的伝統の違いを通じを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、イスラエル建国前に移民したイエメン系ユダヤ人、アラブ・イスラエル紛争の勃発によって1950年前後に移民したイラク系ユダヤ人、そして1960年代以降モロッコ国王の出国許可によって移民したモロッコ系ユダヤ人の三つの事例を比較検討することにより、イスラエル建国後に勃発したアラブ諸国とイスラエルとの間の4度にわたる「中東戦争」の性格を、たんに国家間の紛争という観点からだけではなく、かつてアラブ世界に居住していたユダヤ人の「エスニック」な視座からも問い直すことで、ユダヤ人国家と自己規定しているイスラエルという国民国家の実態を明らかにしたことである。

研究成果の概要(英文)：This project analyzes the Jewish immigration process to Israel such as Yemenite Jews, Iraqi Jews and Moroccan Jews whose immigration processes and settlements were different in terms of the periods, immigration place. The Yemenite Jews immigrated to Israel before the establishment of Israel, the Iraqi Jews' immigrations after Israeli building and the Moroccan Jewish immigrations in the 1960s were analyzed from the viewpoints of the periods and motivations, the absorption process to the Israeli society, the social roles in Israeli society and the cultural traditions.

研究分野：中東近現代史

キーワード：アラブ諸国のユダヤ人 アラブ・イスラエル紛争 イスラエル

1. 研究開始当初の背景

本研究課題「イスラエルへの移民に関するアラブ諸国出身のユダヤ人の歴史認識」は、イスラエルに在住するアラブ諸国からイスラエルに移民してきたユダヤ人の諸コミュニティの自らの移民プロセスをどのように認識しているのかを検討することから始まった。もともと、アラブ世界に居住していたユダヤ教徒は、日常生活では多数派を占めるイスラーム教徒と同じアラビア語（それぞれの地域のアラビア語方言、すなわち「アンミーヤ」の違いはあったが）を使用していたし、ユダヤ教徒のあいだではヘブライ文字で書かれるユダヤ・アラビア語(Judeo-Arabic)と呼ばれるアラビア語方言をしゃべっていた。とりわけ、同じアラブ諸国でもアラブ世界の東側に位置する旧イラク王国出身のイラク系ユダヤ人、アラブ世界でも西側の大西洋に面するモロッコ王国出身のモロッコ系ユダヤ人、そしてアラブ世界の南に位置してインド洋に接する旧イエメン・ムタワッキリーヤ王国出身のイエメン系ユダヤ人という三つの違ったユダヤ人諸コミュニティは、イギリス委任統治領のパレスチナあるいは1948年のイスラエル国の建国後のそれぞれの時期に移民してきたが、その違いの比較・検討を行うことで、それぞれのコミュニティによる新天地イスラエルでの定住の歴史を、移民第二、第三世代がどのように捉えているかという問題関心が生まれたのである。

2. 研究の目的

本研究課題では、とくにイラク系ユダヤ人、モロッコ系ユダヤ人、イエメン系ユダヤ人の三つの事例を中心に検討したが、イスラエル建国前に移民したイエメン系ユダヤ人、アラブ・イスラエル紛争の勃発によって1950年前後に移民したイラク系ユダヤ人、そして1960年代以降モロッコ国王の出国許可によって移民したモロッコ系ユダヤ人の三つの事例は、移民の時期・動機の違い、イスラエル社会への同化の仕方、そしてその後のイスラエル社会で果たした役割の違いを際立たせることになった。換言すれば、イスラエル建国以前の1880年代以降に断続的にオスマン帝国領のパレスチナに移民してきたイエメン系ユダヤ人は、むしろパレスチナに移民したヨーロッパのユダヤ人社会の底辺を支える労働者層として、また、イスラエル建国直後の1950年前後にイスラエルに移民してきたイラク系ユダヤ人はイスラエル社会の都市化のプロセスのなかで都市周辺に中間層として定住し、そして最後に三つのコミュニティのなかでもっとも遅い1960年代以降、モロッコ国王が出国を許可してからの時期にイスラエルに移民してきたモロッコ系ユダヤ人は、むしろイスラエル国内のアラブ諸国との国境沿いの地方諸都市に定住することでイスラエル防衛のための「盾」になった部分が多かった。いずれにせよ、この三つのユダヤ人諸コミュニティは、移民の時期、そしてそれぞれパレスチナあるいはイスラエルへの入植地域も違い、また移民過程も異なっていた。同時に、この三つのコミュニティに属するユダヤ人がパレスチナあるいはイスラエルへの移民、そしてその定住をどのように見ているかの認識のあり方を、各ユダヤ人諸コミュニティが出身地で培ってきた長い文化的伝統の違いを通じて明らかにすることであった。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するために、イスラエルの地方諸都市を訪ねることを、まず最初の目的とした。とりわけ、比較的イスラエルへの移民の歴史が新しいモロッコ系ユダヤ人が多く居住する地方諸都市を訪問することで、その実態を明らかにすることであった。モロッコ系ユダヤ人の諸コミュニティの特徴を一言であらわすならば、食文化の継承という点に典型的に現れていた。というのも、モロッコなどの旧フランス植民地領で現在でも食されているクスクス料理がイスラエルの地方小都市においても多く見られたからである。これはモロッコ系ユダヤ人がモロッコ以来の食生活をずっと継承していることを意味した。また、イラク系ユダヤ人に関しては、とりわけテル・アヴィヴ、ハイファ、エルサレムなどの主要都市の周辺地域に多く居住しており、比較的容易にインタビューなどを行うことができたことを挙げるができる。とくにイラク系ユダヤ人には、大学教授・ジャーナリスト・作家などの専門職を含む職業についており、比較的学歴の高い社会階層に属する人びとが多く、現代ヘブライ語はもちろんであるが、イラクで使っていた標準アラビア語（いわゆる「フスハー」）も自由に操ることのできる人が多かったのが特徴として挙げるができる。すなわち、イラク系ユダヤ人こそがイスラエルにおける標準アラビア語の「正当な継承者」ともいうことのできる役割を果たしていた事実は指摘していいだろう。最後のイエメン系ユダヤ人に関しては、実際のところ、インタビューなどについては困難を極めたことを指摘しなければならない。というのも、イエメン系ユダヤ人は主にレストランやカフェなどの経営者あるいは楽器演奏などの音楽家が多く、じっくりと話を聞くチャンスがなかつ

たことを挙げなければならないからである。イスラエルでは一般的には「オリエンタル料理」という場合はアラブ料理をさすが、ことイエメン系料理に関してはアラブ料理に類似しているものの、「オリエンタル料理」とは区別して「イエメン料理」の店が多くあり、欧米出身のユダヤ人も好んでイエメン料理店を訪れている。そのため、イエメン料理店は都市部ではかなり可視的な存在であると指摘できる。その意味で、イエメン料理店は地方都市に多くあるモロッコ料理店に比して大都市にあるということも特徴として挙げることができる。さらに、イエメン系ユダヤ人は金属工芸の店舗を構えていることが多い。金銀銅などの金属の彫金師も数多くおり、イスラエルのなかの「オリエント」を表象する存在として突出している。むしろイエメン系ユダヤ人が率先してそのような「伝統的工芸」をその特徴として前面に押し出していることも指摘できる。さらに、イスラエルにおける「オリエント音楽」もイエメン系によって担われていると指摘することもできる。日本でもよく知られているイエメン出身の歌手オフラ・ハザ（1957～2000年）はその典型的な事例といえる。

4．研究成果

本研究課題「イスラエルへの移民に関するアラブ諸国出身のユダヤ人の歴史認識」の研究成果としてまず挙げなければならないことは、イスラエルに移民してからもそれぞれの出身地域の文化的伝統を継承し、それを子々孫々まで伝えているということである。これらのアラブ諸国からのユダヤ移民はイスラエルに移民することで、逆にその第3世代、第4世代、さらにそれよりも若い世代が、自らの出身地の文化的な伝統に新たなかたちで再発見し、その歴史的な意味に目覚めるということを指摘することができる。そのことは、イスラエルという新天地でむしろもともとの出身地の文化的伝統を再創出しているとも言い換えることができるであろう。イスラエルに移民してきたアラブ諸国出身のユダヤ人は出身地の過去の事実を直接的に知らないがゆえに、自ら新たに生み出した文化的伝統に目覚める同時に、新たなかたちで自らの出身地での過去の歴史あるいは語りを改めて読み直すことになるのである。すなわち、それぞれの出身地域の文化的伝統についての語りをテキスト化するといったようなかたちで、伝統の再創出の営為を、世代を超えて繰り返しているというのが本研究課題の研究成果として指摘することでできることである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 白杵陽	4. 巻 22
2. 論文標題 イスラエルの建国とパレスチナ問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岩波講座世界歴史	6. 最初と最後の頁 219-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵陽	4. 巻 48-8
2. 論文標題 オスロ合意30年を振り返り、現在、そして今後を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中東協力センターニュース	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵陽	4. 巻 976
2. 論文標題 ハマースはなぜイスラエル攻撃に至ったのか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 20-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵陽	4. 巻 12月号
2. 論文標題 イスラエルにネタニヤフが戻ってくる！米国との軋轢を生む危険性も	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ニューリーダー	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵 陽	4. 巻 11月号
2. 論文標題 イランにおけるヒジャーブ事件 聖典と時代と環境がその意義を変えている	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ニューリーダー	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵 陽	4. 巻 10月号
2. 論文標題 アラブ世界で最も民主的 “チュニジア” の変容 トルコとイスラエルとの外交回復の意味とは	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ニューリーダー	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵 陽	4. 巻 9月号
2. 論文標題 バイデンの中東訪問とプーチンのイラン訪問 ウクライナ戦争も絡む拡大する火種、トルコがカギ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ニューリーダー	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵 陽	4. 巻 8月号
2. 論文標題 イランに保守強硬派の新大統領誕生 逆らうものは徹底弾圧、どうなる核合意	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ニューリーダー	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白杵 陽	4. 巻 49
2. 論文標題 日本の「ユダヤ陰謀論」の源流を探る：四王天延孝を中心に」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 69-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 白杵陽	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 338
3. 書名 「同時代人としての成誠仁蔵 アメリカン・ボード、バハイー教、プラグマティズムとの関連で」吉良芳恵（編集）『成瀬仁蔵と日本女子大の時代』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------